
「満州」分村移民送出母村の社会経済構造

―長野県大日向村の事例研究―

池上 甲一

長野県大日向村（現佐久町大日向）は、一九三〇年代後半から四〇年代初頭にかけて行なわれたいわゆる「満州」分村移民のさきが

けをなした。本報告は、この分村移民を事例に、①農本主義のキ一概念である農村自治の理想型と現実との落差、②「満洲」分村移民が立脚していた理論と農村自治とのかかわり、の二点を説明し、そのことよつて農村自治の限界と可能性（生活の本拠としての農村地域にこだわることの意味）を考察する。

その際、次の三点に重点をおいて分析したい。第一に、大日向村はいかなる社会経済的特徴をもち、その下でどのような生活と自治が行なわれていたのか。第二に、分村移民は自然村的コミュニティを人工的に二分するという不自然さをもつために、さまざまの村の機能不全が生じると考えられるが、この点はどうであったのか。第三に、にもかかわらず、分村移民に傾斜していくとき、村落自治を支える人びとはいかなる論理を編み出して、村人を動員し、あるいは自己納得したのか。

右のような課題を説明するために、以下の順で報告する予定である。

一 大日向村を取り巻く一九三〇年代的状况

1 昭和農業恐慌と村解体の危機

「繁栄とは、たんなる経済状態以上のものである。それは一つの精神状態をあらわす」(F・L・アレソ)。二〇年代の好況と三〇年代の農業恐慌は、大日向にどのような精神状態をうみ出したのか。その精神状態の基礎にある社会的・経済的特質を明らかにする。

2 「満洲」移民政策と大日向村

① 「満洲」移民政策の系譜

② 「満洲」移民における長野県の位置

二 大日向村の自治と分村移民

1 官制自治と自生的自治

村有林の管理・利用と「マケ」集団、貧農層の組織化と堀川清躬（産業組合の結成）自発的経済更生↓自生的自治の動きが

一九三四年に崩壊、内務官僚の介入↓浅川武鷹村長の登場

2 分村移民の経過と計画・実績

3 移民者の属性

三 大日向分村移民の意味

1 分村移民推進者にとつての意味

2 村の農民と地主、商人資本にとつての意味

3 鉾山の再開と労働力移入

四 分村移民にみる「包摂の論理」と「排除の論理」

(近畿大学)